

前号に引き続きまして、米国のカンファレンスClosing The Gapで1996年に発表され、Closing The Gap, vol 16 (number 1, 1-9)に掲載されている論文を翻訳しお届け致します。

著者のLana Sheets (作業療法士)、Mary Wirkus (言語聴覚士)が実施したプロジェクト「Everyone's Classroom」についての結果報告です。

このプロジェクトは米国ウィスコンシン州の教育省によりEarly Childhood Everyone's Classroom Discretionary Grant (助成)を通して資金援助を受け、ウィスコンシン州アシスティブテクノロジーイニシアチブという団体によって運営されました。統合教育が進む中、すべての生徒が積極的な参加ができる環境をどのように創るか、物理的な環境、相互交流、活動の3つの側面から報告と提言を行っています。

## <全体の内容>

- |   |                    |
|---|--------------------|
| 1) 前文   | 5) 特別行事            |
| 2) 物理的な環境   | 6) 相互交流            |
| 3) 相互交流のための環境への配慮                                     | 7) アシスティブテクノロジーの利点 |
| 4) 活動: お話の時間、図工、トイレ、休み時間、<br>おやつ時間、選択の時間 (粗大・巧緻運動の活動) |                    |

前号では3)相互交流のための環境への配慮と4)活動 (お話の時間) までをご紹介致しました。今号では4)活動 (図工からおやつ時間) までをご紹介致します。

## 活動

### 図工

肢体不自由または(及び)視覚障害のある子ども達は机が水平である場合作業が難しいことが観察された。彼らは頻繁に完全もしくは部分的な対称性緊張性頸反射を発生しやすい傾向にある。そのため腕や手を動かすことや物を見たりすることが非常に難しい。また道具を整列させることも彼らにとっては非常に難しいことである。

### 実践(介入)方法

テーブル全体にフィットする、持ち運び可能な斜面台をカスタムメイドで製作した。この斜面台では一度に8名の子どもが作業することができた。斜面台を使うことにより、活動に必要であった物理的及び視覚的な条件が緩やかになり、斜面台を使用する際は頸を不自然な角度に曲げる必要がないため子ども達はより自然な姿勢で作業に取り組むことができた。疲労も減り、また特に視覚障害のある子どもにとっては物体により近い位置で作業ができることが非常に有効であった。

対称性緊張性頸反射のある生徒は傾斜台を使用する時には反射が出なかった。また筋力低下の生徒にとっては斜面台に寄り掛かり、周囲を見ることもできるため非常に使いやすかった。

図工の時間では子ども達が参加しやすくなるよう、様々な筆記用具も準備した。これらの筆記用具はふた付の容器に入れ、それぞれの生徒が自分の使用したいものを選ぶように

した。大きなクレヨン、普通サイズのクレヨン、マジック、キャップ付ボトルに入った絵の具、スポンジブラシ、動物の形のクレヨン、コーンの形の動物マーカー、またSquiggleペン(振動するペン)などは地域の雑貨店で購入した。ハサミについても様々なタイプがあった。持ち手がループ状になっているもの、フィスカス(Fiskars®:アメリカの園芸用品・文具企業ブランド)の普通ハサミ、フィスカスの大きなハンドルのついたハサミなどがあり、また両面テープや付箋テープのように紙を留めるものも準備した。

作品の制作にはフローム(カラフルな色の柔らかい粘土のような素材。動かすとパチパチ音がる)を使用した。フロームは聴覚及び触覚のフィードバックがあり、視覚障害のある子どもに特に好まれた。これらの材料は創造性や積極的な参加を促すため、すべての子ども達に使用した。



## トイレ

バランスや粗大運動のスキルが乏しい子どもはトイレの際、補助をする大人に依存していた。蛇口を回したり、タオルディスペンサーからタオルを引き出すことや電気のスイッチを押すことが子ども自身ではできていなかった。

### 実践(介入)方法

生徒が特別なトイレではなく普通のトイレが使えるように、手すりが横に付いていてサポート力の高いトイレチェアを購入した。延長スイッチを電源に取り付け、車いすに乗った生徒も自分でスイッチのオンオフ操作ができるようにした。ある方法で物事を行うと、ある結果が出ること、つまり因果関係について学ぶ機会を生徒へ与えたいと、職員が考えていたならば、水が自動的に流れるセンサーの導入も適切な方法だと思われる。

## 休み時間

肢体不自由のある生徒はブランコのクサリを持つことができないため、ブランコをする際には職員が膝の上で生徒を抱えて乗っていた。また別の肢体不自由のある生徒は滑り台を安全に下りるために姿勢を保持することができなかったため、下りる際にはいつも介助が必要であった。発語がほとんどない子どもの場合、休み時間にして欲しいことや必要なことなどを伝える手段がなかった。

### 実践(介入)方法

滑り台の上部に手すりを取り付け、子どもが滑り台から下りる際にしっかりと手すりを持って体勢を保つことができるようにした。また肢体不自由が重度な子どもには特別仕様のブランコを購入し、空中を飛ばし楽しさを体験できるようにした。また車いすに乗る子どものために、適切に学校内の歩道を舗装し、遊び場を設けアクセスできるようにした。車いすやその他の移動機器に乗っている子ども達のためには、外でもコミュニケーションできるようにするため、簡易な拡大コミュニケーション機器を屋外に持ち出せるようにした。コミュニケーション機器には休み時間に子ども達が何をするか選択できるように必要なシンボルを取り付けた。機器の使用が難しい場合はサイン言語も取り入れた。



## おやつ時間

肢体不自由の生徒は牛乳パックを持つのが難しく、おやつ時間は職員に頼っていた。おやつは手で食べるタイプのものが多く、道具は特に必要とされなかった。言葉を持たない生徒はコミュニケーション方法へのアクセスがなく、周りとの関わりへ参加したり、自分の意見や必要としていることを表現したりする手段がなかった。

### 実践(介入)方法

牛乳パックから飲む代わりに、小さなグラスを数個、両手ハンドルが付いたカップ、重みがついたカップ、ストローを準備した。周囲との関わり合いや社交化を引き出すため、シンボルをランチョンマットに取り付けた。またおやつ時間に適切な言葉を録音したシンプルなコミュニケーションエイドを設置し、コミュニケーションを促進した。また生徒がサイン言語やジェスチャーを使うことも称賛し、コミュニケーションの効果的な手段として職員や周囲の者は反応を返した。

次号に続きます：

## 参考文献：

Beukelman, D., & Mirenda, P.,(1992), Augmentative and Alternative Communication: Management of Severe Communication Disorders in Children and Adults. Baltimore, MD: Paul H. Brooks Publishing Co., Ltd.

Flippo, K., Inge, K, & Barcus, J.(1995), Assistive Technology: A Resource for School, Work, and Community. Paul H. Brooks Publishing Co., Inc.

本論文の翻訳掲載については、Closing The Gapより許諾を得ております。  
ここで使用しています写真はイメージです。本文の事例そのままではありません。

Vol.130, Vol.131の本論文におきまして、4)活動中の「トイレ」を誤って「入浴」と訳しておりました。ここで訂正し、お詫び申し上げます。